

令和元年6月7日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370369

研究課題名(和文) 子供から眺めた第二次大戦期フランスのユダヤ人迫害の検討

研究課題名(英文) The Jewish Persecution in France During WWII: An Analysis from the Children's Perspective

研究代表者

安原 伸一郎 (YASUHARA, Shinichiro)

日本大学・商学部・准教授

研究者番号：80447325

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究ではまず、ナチス占領下のパリで起こった「ヴェルディヴ事件」をめぐる、その最大の被害者たる子供たちの証言作品がとりわけ日常生活の細部を描いている点を分析することによって、この事件の悲劇的性質を明らかにした。次に、生き残った子供の証言作品を成す言葉が当初から死の恐怖に裏打ちされていること、そして、そうした言葉に接近するには、ピエール・パシェの示すような、言葉の概念を拡大する特異な聴取の方法が求められることを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで疑わしいものとしてさほど顧慮されてこなかった子供の証言作品に焦点を当てることで、第二次大戦期フランスにおけるユダヤ人迫害の実像、とりわけ細々とした日常生活の断絶というその悲劇的側面が明らかになった一方で、そうした証言作品が、出自を偽ることによって生き延びた子供自身のアイデンティティの崩壊と再構築に基づいて織り成されていることから、言葉そのものの再考を促す性質を有することも明らかになった。こうして、子供の証言作品は、信用ならないどころか、戦後文学の少なくとも一部を考察する際の貴重な手がかりとなることが示された。

研究成果の概要(英文)：Focusing on “La Rafle du Vel d’Hiv” in Nazi occupied Paris during WWII, this project explores the tragic aspect of this incident by analyzing how the children, the very victims and survivors of this incident, presented detailed descriptions of their daily lives. Next, the project proves that their surviving narratives will be based on their fear of death from the beginning, and that we will need a specific strategy to approach their narratives, as Pierre Pachet demonstrates in his works to expand the concept of language.

研究分野：フランス文学

キーワード：文学論 ショア 証言 ヴェルディヴ事件

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ナチス占領下のフランスについては、現在まで、歴史学の領域においてすでに多くの重要な研究がなされており、フランス政府およびフランス警察が自ら進んで、ユダヤ人迫害に乗り出していった面が明らかにされると同時に、一般市民の90%を超える層が対独協力もレジスタンスも行なわなかった傍らで、1942年6月の「ヴェルディヴ事件」を皮切りに、ユダヤ系の子供たちまでもが移送されるようになったことが解明されてきている。この「ヴェルディヴ事件」については、2011年、資料館と博物館(Cercil)がフランスのオルレアンに開設されている。さらに、近年の文学作品においては、「ヴェルディヴ事件」にきわめて重要な役割を与えているものがしばしば見受けられる。

とはいえ、これまでの研究においては、戦中にすでに青年となっており、事態を把握することができ、周囲の状況を詳らかにかつ大局的に観察することのできた人びとの証言作品が論じられることがほとんどだった。そうした証言作品こそ、証言の可能性にまつわる考察や自己省察、あるいは収容所にかんする鋭い観察をはらんでいるからではあるが、その一方で、「ヴェルディヴ事件」の主たる被害者である子供たちの証言は、トラウマ体験を扱う精神分析の分野以外ではさほど注目されてこなかった。

そのようななか、近年ではフランスでも、幼少時代の迫害を生き延びた人々による作品が刊行されてきている。彼ら、彼女らは、子供として経験した迫害の実情や意味を自ら解明しようと探究に乗り出し、少しずつではあるが語り始めている。

本研究では、こうした背景に基づいて、第二次大戦期フランスでのユダヤ人迫害について、とくに子供の視点に軸を置くことにした。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、第一に、「ヴェルディヴ事件」の当事者たちの証言作品を比較検討することによって、子供たちから眺められたこれら極限体験の実相の解明を試みる。

この「ヴェルディヴ事件」の特筆すべき点は、子供が親と引き離された挙句に容赦なく連行されたという点にあり、しかもそうした子供の移送が、ロベール・ブラジヤックをはじめとする対独協力作家によって、親と引き離される子供に対する憐れみから発した人道的措置とされた点にある。それゆえ、この事件における主要な要素である子供を考慮に入れ、当時子供だった当事者たちの証言作品を分析することは、この事件の核心に迫ることになると考えられる。すなわち、極限体験の後世への伝承の問題を視野に収めつつも、歴史の大きな流れを知りようもなかった子供たちが眺めた極限体験の細部を浮き彫りにすることを目指す試みである。

(2) 子供の証言はしかしながら、歴史的かつ政治的状況の理解が疑わしく、事後的に得た情報で記憶を歪曲しているのではないかと見なされ、長い間、周囲の大人たちからさえも、信用に値しがたいものとして退けられてきた。

とはいえ、ユダヤ系という自分の出自をカトリック教徒として隠すことなどで生き延びた子供たちが、おのれの生まれ育った言葉を捨て去り、いわば一種の外国語を母語として習得せざるをえなかったことや、そうした事態が子供たちのアイデンティティを大きく揺るがしたことに注目するならば、子供たちの証言のもつ重要性は説得的に解明されるものと思われる。

3. 研究の方法

(1) 第二次大戦期にかかわる文学作品や歴史書、映像資料などを継続して入手し、読解、分析した。それは主として、以下の3つの軸に沿って進められた。

1942年6月の「ヴェルディヴ事件」の全容の把握を目指して、歴史的分析がなされた研究書を購入、分析する一方で、最大の当事者たる子供たちのうち生き延びることのできた人びとの証言作品、およびそれらの作品をめぐる研究書も購入し、分析した。

「ヴェルディヴ事件」には巻き込まれていないものの、ユダヤ系の出自を自分の知らない間に隠し通すことによって、戦中の幼少期をフランスで生き延び、その際の恐怖を戦後になって事後的に感じ取り、考察し続けた作家、ピエール・パシェを集中的に取り上げた。パシェをめぐるのは、2度の国際シンポジウムにて発表し、他のパネリストたちと有益な議論を交わした。

子供の言葉という点に注目し、フランスに限らず、自分の出自を偽り、外国語を母語として習得することになった子供たちの証言作品を購入し、分析した。

(2) 2016年には、フランスのオルレアンに開設された Cercil (Centre d'étude et de recherche sur les camps d'internement dans le Loiret) および、一つの村全体が赤子も含めた虐殺の舞台となったリモージュ近郊のオラドゥール・シュル・グラヌでの資料調査を行なった。なかでも Cercil では、創設者であるエレヌ・ムシャール・ゼー氏から直接案内を受けたことにより、

戦後フランスにおける収容所の記憶をめぐって、強制収容所の記憶から絶滅収容所の記憶へと変容した経緯について、理解をさらに深めることができた。

4. 研究成果

(1) 「ヴェルディヴ事件」をめぐって、とくに子供がフランス国内の収容所（ピティヴィエ、ポーヌ＝ラ＝ロランド）で親と引き離された挙句に東方に移送され虐殺された事実に関心を当てて分析した。この事件のなかで、検挙対象となったパリおよび近郊の外国籍のユダヤ人を親にもつ、フランス国籍の子供たちの存在が、占領当局にとってもフランス政府にとっても懸案事項となり、最終的に、その子供たちが親と引き離されて移送されるに至った経緯を明らかにした。

そのうえで、アネット・ミュレルやガブリエル・ヴァクマンといった、この事件を偶然生き延びることのできた少数の当時の子供たちによる証言作品の読解を通じて、彼ら、彼女らがどのように「ヴェルディヴ事件」を生き、記憶し、証言するようになったかという点、また、証言する際にどのように周囲の無理解という困難に直面したかという点を分析した。さらに、子供の証言作品の特徴として、検挙時にぬいぐるみを一緒に持って行きたいだとか、靴擦れがもっとも気になっていたとかいったきわめて日常的な細部 一般的で包括的な分析からは零れ落ちるような への眼差しが必ず含まれていること、そしてその点こそがえって事件の残酷さを際立たせていることを明らかにした。

(2) 迫害を受けた子供たちの証言作品を成す「言葉」、およびその子供たち自身にとっての「言葉」について考察、検討した。アハロン・アッペルフエルドやサユル・フリードレンダーをはじめとして、物心つく時期に反ユダヤ主義の波に吞まれた子供が、しばしば自分の出自を偽るか隠すかして生き延びたことに注目し、彼らが、それまで生まれ育った言葉を捨て去って外国語を習得せざるをえなかった経緯、そしてそれが自分のアイデンティティを根本的に揺るがした事態を、カトリーヌ・コキオやジョルジョ・アガンベンらの考察を参照しつつ分析した。

そのうえで、そうした母語の新たな獲得が、大人の世界に入るためというだけでなく、何よりもまず生き延びるためであり、さらには自らの経験を証言するために行なわれたという事態を明らかにした。当時の大人たちが、迫害以前の回復すべき戦前の生活をすでに知っていたのに対して、子供は、迫害以外の世界を知ることなく言語を習得し直すことを余儀なくされ、回復すべき平穏な幼少期をもつことがなかったという事実から、言葉をもたぬ存在としての「インファンシ」という概念を援用しつつ、子供たちの証言作品を形作る言葉そのものが、大人たちにとっては未聞のものとして存在し、端緒から死の恐怖に裏打ちされたものとして立ち現われることを論じた。

(3) 以上の研究より、当初の計画とは異なり、証言作品の「自伝」としての性格をも考慮すべきであることが明らかになった。

そこで、ユダヤ系という自分の出自を知らされぬことによって、戦時中のフランスを生き延びることのできた子供である作家、ピエール・パシェについて、彼が、自分の身の危険を事後的に理解したことによって、情動や内面の徹底した探求へと向かうことになった経緯、そして彼がそうした探求に際して非順応主義を貫いている点を解明した。その際、彼の主著『父の自伝』を取り上げつつ、亡き父の「自伝」の執筆という試みを可能ならしめているのが個人の内面性への注視であり、それゆえに本書は、単なる一家族内の物語として閉じられることもなく、20世紀前半のヨーロッパの歴史に翻弄される一青年を、抽象化したり一般化したりすることもなく、逆に数々の出来事の当事者かつ観察者として描くことに成功しているのだと分析した。

また、証言作品一般のもつ自伝的側面を考慮すべく、パシェの作品の特性、なかんずくたぐいまれな聴取の試みとしての性質を分析した。そこでは、パシェの観察の主軸たる「内奥／親密さ」とは、自己を問いただすだけの閉塞的な内省に留まるものではなく、逆説的ながらも、公共空間に開かれようとする個人としてのあり方にほかならない点、そして、パシェの述べる公共空間とは死者なども含むがゆえに、その空間での言語は、単なる意味のやり取りの手段というだけでなく、個人間に横たわる越えがたい境界を乗り越える試みとして捉えられる点、そして、パシェが、意思疎通の困難な存在に対して、むしろ言語の可能性を広げようとしている点を明らかにした。

そのうえで、パシェのこうした構えこそ、フリーモ・レーヴィの伝えるアウシュヴィッツの子供「フルビネク」の謎めいた「言葉」——アウシュヴィッツで生まれた以上、アウシュヴィッツ以外の世界を知りえない存在によるアウシュヴィッツの証言——に接近する手がかりを与えてくれるのだと論じた。

(4) フランスにおけるショアー研究の第一人者である歴史家、アネット・ヴィヴィオルカが、第二次大戦期のユダヤ人虐殺をめぐる呼称の歴史や、歴史家にとっての証言作品の意義について論じた論文「証言と歴史を書き記すこと」を日本語に翻訳し、『越境する歴史認識』（岩波書店）に発表した。

(5) 2016年に行なった Cercil などでの資料調査については、2019年度中に論文としてまと

め、発表する予定である。

(6) 以上のように、本研究では、第二次大戦期のフランスにおいて、「生きていてはならない命」と見なされたユダヤ人に対する迫害について、子供に焦点を当てつつ、「ヴェルディヴ事件」の実相から、子供の証言作品の「言葉」へと考察を展開してきた。しかしながら、子供という視点からすれば、本研究の当初の計画に反して結果的に扱うことのできなかった、「生み育てるべき命」を対象としてフランスでも実行された、レーベンスボルン計画についても、検討していく必要が大いにあるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

Yasuhara Shinichiro, « La perspicacité non-conformiste de Pierre Pachet », 『総合文化研究』、査読有、第25巻第1号、2019年、p. 1-10

Yasuhara Shinichiro, « Ecouter une parole muette – sur *Autobiographie de mon père* », 『文芸研究』、査読無、第135号、2018年、p. 29-43

安原伸一朗, 「ショアーと子供の言葉」, 『総合文化研究』、査読有、第22巻第1号、2016年、p. 1-16

安原伸一朗, 「ヴェルディヴ事件の子供たちとパリの文壇」, 『総合文化研究』、査読有、第21巻第1号、2015年、p. 1-17

〔学会発表〕(計3件)

Yasuhara Shinichiro, « La perspicacité non-conformiste de Pierre Pachet », Colloque international « Pierre Pachet ou l'essai autobiographique et les avancées de la littérature », 2018年

Yasuhara Shinichiro, « Ecouter une parole muette – sur *Autobiographie de mon père* », Colloque international « Un individu en Asie : lecture de l'oeuvre de Pierre Pachet », 2017年

安原伸一朗, 「ショアーと文学——子供たちの言葉」, 「フランス現代文学における第二次大戦の記憶」公開研究会、2015年

6. 研究組織

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。